

英語史で解く 英文法の謎 — なぜ「3単現の s」をつけるのか

1. 現代英語の「いびつな」現在人称活用

私たちが中学校で最初に習う一般動詞の活用（例：*learn*「学ぶ」）を改めて見直してみましょう。

人称	単数形 (Singular)	複数形 (Plural)
1 人称	I learn	we learn
2 人称	you learn	you learn
3 人称	he/she/it <u>learns</u>	they learn

ご覧の通り、6つのスロットのうち、「3人称・単数・現在」の場所にだけ、たった1つポツンと「-s」がついています。なぜこんな不規則でいびつなルールがあるのでしょうか？

2. 千年前の「古英語」の時代はどうだった？

今から約千年前、現在のイングランドで話されていた「古英語」の時代には、動詞（例：*leornian*「学ぶ」）は主語の人称や数に応じて、以下のように語尾が激しく変化していました。

人称	単数形 (Old English)	複数形 (Old English)
1 人称	ic leorn- ie	wē leorn- iaþ
2 人称	þū leorn- ast	yē leorn- iaþ
3 人称	hē/hēo/hit leorn- aþ	hīe leorn- iaþ

当時は、主語が *ic* (I) なら語尾は **-ie**、*hē* (he) なら **-aþ** と、きれいにすべて区別されていました。元々は「各々のスロットに、異なる語尾が存在していた」のです。

3. 謎を解く歴史の2大ドラマ

では、なぜ千年経った今、3単現の「-s」だけが生き残っているのか。そこには「自然の言語変化」と「歴史の偶然」という2つのドラマがありました。

(1) 「自然の言語変化」による他の語尾の消失

英語は長い歴史の中で、語尾の母音が弱まり、やがて消えていくという「自然の言語変化」を経験しました。これにより、1人称や2人称、そして複数の語尾が、数世紀の時間をかけて次々と削ぎ落とされ、結果として動詞の原形 (*learn*) と同じ形になっていきました。しかし、この削ぎ落としの経路 (パターン) には方言によって色々な可能性があり得ました。

(2) 「ロンドン方言」が標準英語になったという偶然

14世紀後半以降、イギリスの首都であるロンドンが、政治・経済・文化の絶対的な中心地として発展します。その結果、ロンドンの知識階級が話していた「ロンドン方言」が、現代の「標準英語」の直接のルーツとなりました。

実は、当時のイングランドは「3単現に -s をつける方言」や「つけない方言」、むしろ「複数のときにつける方言」など、多様な方言が存在していました。しかし、たまたまロンドン方言が、この「3単現に -s を残す」パターンを用いていたのです。

4. 結論

ロンドンがイギリスの中心になったのは、社会的な様々な要因はありましたが、いってみれば歴史の「偶然」にすぎません。

つまり、「自然の言語変化によって多くの語尾が消えた」という言語の都合と、「3単現にたまたま -s を残していたロンドン方言が標準語になった」という社会の都合。この2つが奇跡的に重なった結果、現代の私たちはこのいびつな「3単現の s」を勉強することになっているのです！

■ さらに深い「英語史の沼」へ

学校英語の「丸暗記」の裏に隠された歴史のミステリー。なぜ *go* の過去形は *went* なの？なぜ英語の語順は SVO なの？本書を開けば、明日の授業で話したくなる 24 の謎の答えが、ドラマチックに明かされます！

- 堀田 隆一 『英語史で解く 英文法の謎 — なぜ「3単現の s」をつけるのか』 NHK 出版〈NHK 出版新書〉、2026 年。
- 著者公式特設 HP：<https://user.keio.ac.jp/rhotta/hello/lp/nazesantangen/index.html>

